

杉浦 正健・有村 治子 本協会理事に聞く

地政学的な視点を持って 地道な民間交流活動の継続を



杉浦正健 弁護士・元衆議院議員
昭和9年愛知県生まれ。東京大学卒。昭和47年弁護士登録。昭和61年衆議院議員選挙（旧愛知4区）当選。外務副大臣、内閣官房副長官、法務大臣等を歴任。平成29年4月に旭日大綬章を授章。平成4年度より本協会理事。

初訪マは昭和三八年

——留学生受入関係のお仕事はどのような経緯で始められましたか。
杉浦 アジア学生文化協会創設者の穂積五一先生と若手が結集して、昭和三六年に海外技術者研修協会という組織を産省と一緒につくったのですが、東京オリンピック以前のことで、よくできたと思います。

その関係で、私がマレーシアと関わったのはオリンピック前年の昭和三八年です。アジア学生文化協会がつくった海外技術者研修協会の第一回帰国研修生実態調査で行きました。当時は外貨不足で、予算は一〇〇米ドルでした。当時は一ドル固定レートが三六〇円、ヤミドルが四〇〇円ぐらいだったので渡航は楽ではなかったですね。

私は昭和二八年に東京大学へ入りました。学生運動が華やかな時期で、昭和二七年の血のメーデーの翌年に入学したわけです。都会の学生はハイクラで髪を伸ばしていました。田舎者の私は丸坊主で東大駒場に入りました。その後、昭和三〇年に本

郷へ移ったときに、穂積先生の寮にたまたま入りました。

日本では、昭和二九年から国費留学生として東南アジアから留学生を受け入れ始めており、先輩方は偉いと思います。留学生は東京外語大か大阪外語大で一年間日本語を勉強して、昭和三〇年から東大を含め全国のキャンパスに入ってきました。一年生の頃は講義についていけませんよね。私は本郷にいましたが、駒場の連中がアジア学生友の会をつくって、ノートをとって彼らに教えるといったお話を始めました。まだ留学生宿舎もなく、住宅難の時代で大変でした。

マレーシアにとってみれば、かつての大東亜共栄圏の国で、今は国民が食うに困っている国、こんな国になんで留学生が来たのか、とても興味を持って、駒場と情報交換をしたのですが、こんな受け入れ状態では日本に対する感情を悪くして帰ってしまうのではないかと思います。例えば、今でこそ、大学の学食でイスラム教徒に対するハラール対応をしているところがありますが、あ

の頃は全くなかったですからね。

穂積先生は、憲法学者の上杉慎吉東京帝大教授が創設された寮を主宰しておられたのですが、岸信介さんは上杉先生の高弟の一人でした。岸さんは寮の先輩になりますので、安倍晋太郎さんは岸さんの秘書官をやっていたところから知っています。穂積先生が留学生の世話をするために、元留学生に会って話をすることになり、マレーシアへも行くことになりました。今こそマレーシアは発展していますが、当時は自然のまま、クアラルンプールでも高い建物はなく、森の中でした。今昔の思いです。ペナン島にも船で行って、へビ寺も見てきました。その後、留学生や技術研修生も受け入れる仕事を一〇数年していました。

そんなことで留学生のお世話を始めたわけですが、その後、日本への留学生は徐々に増え、その内のお一人として有村先生のご主人もいらしたわけです。

塩川先生のご縁で協会に参画

——国会議員になられてからは、マ

有村先生のご主人との出会い

——杉浦先生と有村先生のご縁についてお聞きします。

杉浦 マレーシアからの留学生だった有村先生のご主人とは一度お会いしたことがあります。大学をすでに卒業された後だと思いますが、アジア文化会館にいらして「後輩がお世話になります」といったご挨拶を頂きました。私がアジア学生文化協会と海外技術者研修協会（AOTS）による東南アジアを中心とした途上国の留学生・研修生受け入れ事業に

おけるレジエントの一人であったからだと思います。

有村 その通りです。杉浦先生とお会いすると言ったら、主人はすごく喜んでいました。

杉浦 ご主人が来日されたのはルクイースト政策導入後の昭和六二年頃だと思えますが、私は国会議員になっていました。ご主人はアジア文化会館にいらして「杉浦先生に大変お世話になりました」とおっしゃってくれました。昔と違い、対等の立場で友人もでき、悪い思い出がなさそうだったのは嬉しかったですね。

レシーアとどのように交流されてきましたか。

杉浦 お陰様で国会議員になってからも、塩川正十郎先生からお誘い頂き、日本マレーシア協会と日本マレーシア友好議員連盟に入らせて頂きました。塩川先生は熱心にマレーシアとの交流をされていて、二〇年近く日本マレーシア協会の会長をされていまして、私は平成四年度から理事として参画しています。議連では最後の二〇年ぐらい、平沼赳夫会長のもとで幹事長をやらせて頂きました。マレーシア訪問など様々な交流を通じて非常に勉強になりました。

残念ながらマハティールさんとは会えなかったのですが、その後の首相や閣僚とは、来日される度に議連で懇談会を行いました。マレーシアからは要人が時々お出でになるのに、日本からはあまり行きませんでしたので、おかしいと思っていました。当時、日本の総理はほとんど行きま

せんでしたから。有村 今年は皇太子殿下が行啓されましたね。

稲作文化と衣装の共通性

——マレーシアで印象に残っていることを教えてください。

杉浦 最初にマレーシアへ行ったとき、公務は二、三日だったので時間があつたので国立博物館に行きました。そこでびっくりしたのは、古代マラヤ人の生活を描いた絵画でした。二、三千年ぐらい前の時代のものでしょうか。そこに描かれた古代マラヤ人の衣服が、日本の神官が着ているものとそっくりなのです。

確かに、神官の服装は涼しくできていますね。驚いたので、博物館の方にこれは神道と関係があるのではないかと聞いたら、関係があるとは思わないとのことでしたが、それが印象に残っています。

その後調べたら、お米の原産地は



有村治子 参議院議員 比例代表(全国区)選出
昭和45年石川県生まれ。滋賀県育ち。米国SIT大学院修士課程修了。平成13年、参議院選挙(比例・全国区)に初当選。現在、3期目。文部科学大臣政務官、女性活躍担当大臣を歴任し、現在は自民党政調会長代理。平成29年度より本協会理事。

雲南地方だと言われている、そこから日本にも伝わってきたわけですから、米づくりに関係があるのではないかと思います。お米も椰子の実みたいに、南から来たのかもしれないですね。神官の服装は昔からあのような様で、非常に洗練されていますね。米作りが伝わった地域の農民の人たちについていろいろ調べて、そのように思いましたね。

貧しかった子供時代

有村 先生は何年生まれですか。

杉浦 昭和九年です。

有村 私の父と同一年なのですね。お若いんですね。

杉浦 今八三歳ですが、まだ現役で仕事をしていますよ。

有村 だからお元気なのですね。恐れ入りました。

杉浦 昔の女性は、料理も洗濯もがんだ姿勢で行うから、五〇歳ぐらいになると腰が曲がってきたものでしたが、今は腰が曲がった女性はあまりいないのではないのでしょうか。洗濯機の発明、水道の普及、炊飯器などが女性を家事労働から解放しました。

私の故郷の三河は、海から三〇キロぐらい離れていますから、子供の

頃は海の魚を食べたことはなかったです。自然は満喫しましたよ。車がないから交通事故はなかったし、いわゆる文明生活とは大きく違いました。戦争中で、若者がどんどん出征して、お年寄り和孩子だけでしたから、百姓仕事もやらざるを得なかったので力を合わせて仕事をしました。都会ではもっと大変で、食べるものがなかったもので、よく買い出しに来ていました。あのようなことは二度としたくないですね。

農家では、梅雨時に「ごろろ」と雷が鳴ると、そろそろ梅雨も終わりがなと思ったものです。自然の中での家族の営みは、今から思い出すとそれがあつたから家族の絆が強かったと思います。今の子供たちに何か自然と関わる体験を工夫しなければいけないと思います。例えば、夏休みには田舎の小学校へ行つて、先生と林間学校をするといったことなどです。

今の子供たちは私達の時代と比べると極楽に暮らしているようですね。私は高校生まで家は貧しく、風呂は五右衛門風呂でした。井戸からの水汲みと風呂焚きは子供の仕事です。お湯もじゃあじゃあ使えなく、手桶一杯で体を洗いました。洗濯は洗濯板でしていたので、それは重労働でした。

今の子供たちは勉強ばかりですが、ある意味ではかわいそうですよ。外で遊ばず、川でも泳がないですね。それだから川には今、魚がたくさんいますね。

地政学的に重要なマレーシア

——今年度から、有村先生に日本マレーシア協会の理事にご就任頂きました。

有村 ありがとうございます。

杉浦 かつて私にご挨拶を頂いたご主人は、マレーシア出身の方なのでご縁がありますね。また、今、有村先生は日本マレーシア友好議員連盟の幹事長をされています。ですから、議員の中で最も協会の理事にふさわしい方だと思います。私はアジア関係の議連はほとんど参加しましたが、マレーシア議連は協会同様、塩川先生との関係からです。

有村 塩川先生はどうしてマレーシアと関わられたのでしょうか。

杉浦 私が先生からお聞きし、感じ取ったのは、マレーシアの地政学的な重要性です。アセアン一〇ヶ国の中でマレーシアはビッグ3に入るのでしよう。イスラム教徒が多いので中近東などのイスラム圏に近く、経済を握る華人が多く中国との関係も深い、またインドとの人的繋がりも強いんです。また、独立以来、絶えず日本の方を向き、日本から学べということまで前進してきていらつしやる。

アセアン全体を考えると、あと五〇年、一〇〇年後にはEUのようになると思います。多様性がありますが、方向性としてはそういうことだと思っています。そういう観点から見ると、アセアンは輝いていくと思うのです。中国とインドという古来の大

国の間で、圧力を受けながらも、その間にあって生き永らえてきた人達の集まりですね。

そういった人々、国々がアセアンとして事務局をインドネシアに持ち、憲章もつくり、徐々に進んできていますし、これからもそのような方向でいくと思います。その中のマレーシアの位置付は大切だと思います。

塩川先生は様々な団体の会長をおやりになられましたけど、協会や議連を通じてマレーシアに力を入れてこられたのは、地政学的なことをお考えになられたことだと思います。それ故に、日本マレーシア協会は非常に地道な活動を行っています。学生交流や植林活動など、ルックイースト政策と合った活動となっているわけです。

その協会に有村先生が理事として入って頂けたことは素晴らしいと思います。マレーシアに対する想いという点では、愛するご主人がマレーシアの出身ですから、全然違うと思います。

有村 主人を含めてマレーシアの若手が、杉浦先生をはじめ創生期の先輩方に心から敬愛の念を持っているのは、「日本がいわゆる先進国、マレーシアが後進国」という視点ではなく、アジアの友として共に歩んでいこうという視点をもち続けて頂いているからです。今こそ、共生は大事な概念になっていきますけど、その頃の格差は半端ではなかったと思います。

杉浦 東南アジアは客が多いですね。英語、マレー語、北京語、福建語、広東語、客家語を操るので、なんて頼もしい人なのだろうと思っていました。昨年、日マ議連でマレーシアに行かせて頂くと、そういうツワモノが沢山いらして、彼だけが特別ではないので、「騙された！」(笑)と思いました。本当に頼もしいと当時は思っていたのですけれど…(笑)。

有村 先生は昨年マレーシアを訪問されました。

有村 昨年マレーシアを訪問し、政治家の方々とお目にかかりました。本、本当に優秀な方達がとにかく日本、ルックイーストで、彼らが三〇代、四〇代になって社会の中核を担ってくださっていることをありがたく思いました。

ただ、美談ばかりではなく、率直に語って頂いた中で、かつてほど日本のプレゼンスがないとも言われました。欧米系で学位、修士号、博士号を取れば出世も早いけれども、日本では部長や社長になるのに時間がかかり過ぎ、二〇年も二五年も待たないということでした。海外はそのポジションに着けば三年から五年でしっかりと重役になれるといった違

杉浦 日本の世間でもありましたよ。有村 そんな中で、今で言う上から目線が全くなくて、アジアとして共に安全と繁栄を手にしよう、その時点で情熱を向けて頂いたことが本当にありがたくて、人格と人格による魂の交流、その姿勢と熱意にどれだけか救われたかということ、主人から聞いています。

杉浦 それを聞く过瘾です。私達は戦中戦後の時期を見ているから。沖縄が占領下だったオリビックの前半に、フィリピン、ベトナム、タイ、ミャンマー、インド、スリランカ、マレーシア、インドネシアをぐるりとひと回りしました。どこへいっても発展途上国でした。私達の小さい頃そっくりですよ。自然の中で生きている。子供たちが元気で、目が輝いていました。私達の頃も輝いていましたよ。

日本は当時、もはや戦後ではないと言われ始める前で、戦後徐々に発展して威張り始めていきましたが、なんてことはない、戦前戦中はもつとひどかったわけですよ。あんな状態がよく戦争をやったものだと思います。あれだけの軍備に使った金額を民生に使ったら、もつと良い国になったと思います。

私は『あの戦争は何だったか』という本を書いたのですが、表紙に岡崎の矢作橋が描かれている。広重の絵を使いました。皆、私が岡崎出身だから。私には、戦後にはないと言われ始める前で、戦後徐々に発展して威張り始めていきましたが、なんてことはない、戦前戦中はもつとひどかったわけですよ。あんな状態がよく戦争をやったものだと思います。あれだけの軍備に使った金額を民生に使ったら、もつと良い国になったと思います。

このご指摘です。日本だけが圧倒的に強いのなら日本のやり方で良いけれど、スピードが速い世界ではそれに対応した施策をとらないと、皆日本に來なくなり、ますよ、と。日本を誰よりも愛し、青春を日本にかけてくれた人たちが幾度も、それは流暢な日本語で、仕事を含めて完全なバイリンガル・バイカルチュラルな洞察力を以て言ってくれたことは、政治家として大変印象に残りました。

日本はかつてのフランスになりつつあるとも言われました。エスプリがあり、文化的に非常に良い国だけれども、生きていく上ではあまり関係がないということ。No. 88 だけと言語ではない国になって良いのかどうか。そういう意味で、日本のプレゼンスがもつと見えて欲しいと、日本を想うが故に切実に言ってくれたことは、ぐざりときましたね。

杉浦 国境の壁はどんどん低くなると思えます。今、日本は人手不足ですね。マレーシアもそうですが、ベトナム、ネパール、ミャンマーなどでは人口が増えていますね。もちろん女性が子供を産み育てられるような社会にする努力は必要ですが、さしあたって、この人手不足は移民で解決するしかないと思います。一定の条件を満たせば定住権を認めて、一〇年ぐらい犯罪歴なく、日本語が出来て情報がきちんとある人に国籍を与える。欧州やアメリカの移民政

策のように、東南アジアの人材を日本人として受け入れるというように、国を開かなければやっていけないような気がしますが、いかがでしょうか。私が顧問をしている協同組合で海外から技術研修生を受け入れていますが、私が現職の頃は二年、延長しても三年でしたが、今は五年間となりました。一企業が協同組合と提携してベトナムから受け入れることは出来ませんが、五年経ったら帰らなければいけません。ベトナムに日本企業がどんどん出ていますから、向うで日本語を勉強し、日本に來ても勉強して、技術を覚えさせます。

若者たちの夢に込められる国として、総人口の四、五%ぐらいまで国籍をオープンしてもよいのではないのでしょうか。ご主人のように本当にまじめで一所懸命の人がいますからね。私がよく行く「すきや」では、ベトナムの方が二人でやっています。チェーン店では大工場が生産して、店舗ではチンと温めるだけで何でも出てきて、おいしいですよ。あのよ

うな子たちが、普通の生活をしていくようになっていっているのではないかと、思っています。現職の先生に国を開く、国籍を開くということを真剣にご検討頂きたいと思えます。

マレーシアの方の忠告は私も聞きました。国費留学生に聞いてみると、第一志望はアメリカだった人が多いですが、それでも日本を選んだわけ

です。日本はなぜあの敗戦から立ち

目のお奥さんになるわけ？」といった異郷の相手に対する不安にかられた質問攻めです。先生と伺い年の父は「日本とマレーシアが戦争状態になったら君たちはどっちの国家に忠誠を誓うのか」と、真顔で問うてきました。当時主人は三二歳、私は二八歳で、二人とも四苦八苦しましたけれど、「日本とマレーシアが戦争にならないように、私達が最後の砦になります」と、泣きそうになりながら正座して、何とか結婚を許してもらえました。

先の大戦に対する認識は、主人と私では全く違います。主人の父方と母方の祖父は、二人とも日本軍に連行されて帰らぬ人になっています。おそらく对中国戦への資金と情報を断つたためだっと思えますが、死に方も分からず、遺骨もありませんので、主人とは近現代史に対する認識がかなり違うだろうと思っていました。しかし、その主人が心して靖国神社にお参りしてくれます。日本が戦火を交えた相手側の遺族である主人の感情を考えると、私は少し遠慮があったのですが、主人曰く国家のために命を捧げた方々に敬意を表するのは、どこの国民でも大事なことです。

私達は両国が戦争状態にならないように最後の砦になるということをやつと結婚を許され、結ばれているので、国籍に対して非常にシビアな視点を持っています。それが民進党代表(当時)蓮舂氏の「重国籍問題

は、どこの国民でも大事なことです。

上がったのかを見たと言っています。そういう優秀な人に、少しづつ、日本国籍を開いていけばよいのではないかと思えます。

日マ関係についてお聞きします。有村 マレーシアを訪問して思うことは、皆さん英語が堪能で、それ以外に自分の母語も持っています。日本人は、英語は文法が正確じゃないと口に出さないので、「下手でも良いから最後までしゃべっていたほうが勝ち」というように、勝負のかけ方のルールが違うような気がします。そういう意味では「通じてなんぼ」と思っている人たちと、「完璧な文法でコミュニケーションしなければいけない」と思っている日本人の発信力の差を感じます。多様な中で生きていく逞しさは、もつと日本人が学べるんじゃないかと思えます。

先程、杉浦先生がお話になりましたが、日本からイスラム教世界を見るには、イスラム穏健国としてのマレーシアはゲートウェイとなりますし、最近、日本人の中にもイスラム教徒の方がいらつしやるという状況です。インバウンドがこれだけ多くなっていることを一時的なブッシュンと捉えずに、例えばISの問題をどうするか、世界的な宗教の一角を占めるイスラム教・教徒とのように向き合うのかというときに、私達が身近に考えていく友人のあり方としてマレーシアをマークすべきで

で、私が自民党を代表して国会質問に臨み、「国会議員なんかずく総理大臣や閣僚が、日本国以外の国籍を持たないというのは、国家国民に対する忠誠の基本である」と主張しました。国籍がどれだけ大事かということを痛感している証左でもあります。華僑は、国家に守られないからこそ、自分で生きて行かなければいけないという、非常に強い認識を持っています。政府に守られる感覚がないので、いざという時も生き延びていくために、アメリカドルか金(きん)を準備し、自ら生きることにはハンズリーであり、ごく当たり前のように自分自身で身を守るうとする日々の危機感が、私にとつて頼もしく見えたのだからと思えます。

日本人は、国家が守ってくれるのが当たり前という期間が長いので、国家を意識するとか、世界の中で国籍やパスポートに守られずに生きていくことがどれだけ大変で、日本がどれだけありがたいかということが伝わりにくいかもしれせんね。

有村 もともとは客家です。主人は差別や偏見が少なかつた日本社会においても、マレーシア国籍であり続けることに誇りを持っていたのですが、私が国家機密と向き合う議員となった以上、「日本国籍を取得することによって、日本と運命を共にする」という意志と覚悟を明確にして、有村を応援して下さる皆さまに安心して頂きたい」と申し出てくれ

は、どこの国民でも大事なことです。

先日、日本マレーシア協会の創立六〇周年懇親会に出席させて頂きました。地道に、堅実に、先輩方が戦後の厳しい中からこれだけの信用と実績を築いて頂いたのだと感慨深いです。その「中今(なかいま)」を、たまたま命のリレーの中間走者として、私達の世代がバトンを受けさせて頂いているのは非常にありがたいことです。しかも、協会の理事を担って下さっている皆様、掛け値なしに日マ両国の未来を信じて、真面目に取り組んでおられます。物事を解決する術を持った方々が、理事長や理事になって下さり、企業の方々

と対等に渡り合って、情報や資金、また政府機関を動かす信用力を持つて下さっているのは、簡単なことではありません。歴史と格式があるだけに、その伝統に私達世代の貢献をしていかなければならない、傷をつけれないという怖さも感じ、かえって慎重になります。

昨年マレーシアに行った際に日本人墓地にご案内頂いて、色々考えることがありました。日本人墓地の土地はマレーシア国から無償で供与されているのですが、その契約書がきちんとなされていないことが分か

は、どこの国民でも大事なことです。

りました。日本とマレーシアが、持ちつ持たれつでお互いに高め合っていく関係であることを考えると、この土地は五〇年なり一〇〇年なり、半永久的に日本の墓地として貸すという契約をつくるべきではないかと、両国のために苦勞をしてきた方々が主として眠られるお墓に献花をして感じました。

いわゆる「からゆきさん」が、九州の貧しいところから渡られてマレーシアで亡くなられた場合、お墓が

日本の方を向いているものもあるし、「何で私だけ異郷の地に」という思いで、最後まで「両親はじめ日本に複雑な気持ちを持っていった」ということで、日本に背を向けていらつしやるお墓もあるということ伺いました。複雑な思いで暮らした先人たちを、この墓地が受け入れてきたのだと感じました。そのようなことを、熊本、宮崎など、彼女達の出身地である現在の九州の方たちがどれだけご存知でしょうか。眠られている方々のお名前は、ほとんどが二文字の女性のお名前でした。どの時代も交流があり、きれいなことだけでは片付かない皆さんの複雑な想いをこの土地が受け入れてきたのだと思うと、墓地の土そのものも愛おしく感じましたし、ここに休めるところがある

ということが、マレーシアで頑張ってきた日本人の方々の心の安寧にもなってきたということ、政治家として、また日々に想いをつなぐ一員としても心に刻みます。明日シヤベ

ルでひっくり返されるかも…という不安なく、心の安寧の場であり続けて欲しいと思います。

在マレーシア企業や日本人学校が、ずっと日本人墓地の清掃や草刈りを続けて下さっている実績も非常に有難く、海外ではこのように日本のことを想ってくださっている人がいるということ、政治家としてお伝えしたいと考える次第です。

杉浦 マレーシアに日本人墓地は何カ所あるのですか。

有村 三〇カ所近く点在していて、草むらのような所もあるので、きれいにまとめたたいというのが、日本マレーシア友好議員連盟の古屋圭司会長のお考えでして、私も共感するところ。手の行き届かない所があり、草茫々であるのも許されることではないので、ちゃんとまとめるのも一つの方法かと。

日マ関係だけでなく政治家としても痛感していますが、戦後の慰霊碑などが先の大戦の激戦地には多くありますが、戦後七〇年を過ぎ、追悼してくる人がいない、誰のお墓かも分からない状況になっている所があります。避けなければならぬのは、誰のものかも分からない、ほったらかしになっている状況です。そうなる、御霊も安らかならざる状況なので、きちんと管理ができ、持続的な管理が可能になるように考えていかなければならない時代に入ってきています。若くしてその地で亡くなり、吊ってくれる子孫を持た

ない方もおられるので、時代の継承という意味で、戦後七〇年を過ぎた現在、一つの節目に入っていると思います。

杉浦 政府間の協定で墓地を維持するのは、戦争で与えた被害もあるのに、なかなか難しいと思います。宗教も関わってくるので、民間団体にやって頂いた方がよいのではないかと思います。

例えば、ミャンマーではインパール作戦で大勢の方が亡くなっています。イラワジ川を越えた真ん中の川で、最も多く亡くなっています。墓地が数えきれないぐらいにありますよ。ミャンマー人は仏教徒が多いので、丁重に扱ってくれています。鹿児島県人会の方などが行かれています。数が多くて政府は手の出しようがありません。フィリピンになると、どこで何人亡くなったかも分からない状況です。そうだったこと、補足も大事なことだと思います。

協会と議連の活動は重要

有村 日マ経済関係で言えば、昨今は日本が新幹線を売り込むことが課題となっていますが、日本技術は素晴らしいが、価格競争力が結構厳しいと伺いました。日本人にとってありがたい、かゆいところにも手が届くような性能を、マレーシアの方々も求めているのかというと、そうではないかもしれないので、お買得感を出さかというところを、議連としての先方政治家との率直な交

流から教えて頂きました。

今、大阪万博誘致について、マレーシアは中立だそうですが、日本を応援してもらえるようにして欲しいと、外務省が各国との友好議連に働きかけています。こういう具体的なミッションにおいても頼りにしてもらえる日マ協会や日マ議連はとても嬉しいですし、そこに身を置くことをありがたく思っています。経済的にも、心理的にも、歴史的にも明日を生きていくことで持ちつ持たれつになる関係がお互いに重要で、駐日マレーシア大使をはじめ、そのような関係が持てていることに非常に勇気づけられます。

杉浦 一つ付け加えたいのが学生など若者の交流です。とても大事なことです。有村先生のご主人が日本に留学されてご縁ができたように、若い人が交流することで、そこから何か生まれてくると思います。

有村 先程、杉浦先生が日本はとすると井の中の蛙とおっしゃいましたが、日本が本当にアジアのリーダーとして地位と信用を確立していくためには、日本にいるだけではなく東南アジアに身を置いて、初めて戦略的、地政学的重要性や海を制することの重要性が理解できるのかも感じません。

海洋国家日本としてのアイデンティティー、アジアの中のリーダーであり続けるための友好、アライアンスをもつという意味でも、東南アジアで一定の期間生活をするとか、友

を持つということは、「世界の中の日本」のポジショニングを考える上で非常に大切ですし、欧米などに留学に行くよりもはるかに手軽にできる、身近な国際化だと思います。東南アジアの人たちは非常に強く、ちよつとしたことではへたれませんがあのガッツや、世界の中で生き延びて行くためのタフネスを、もう少し見習ってもよいのかなと思います。

杉浦 ブロックな英語でも徹底的に主張するというのはよく分かります。私が東南アジアの人たちと付き合ってきたことは、多様なアジアの中で、日本は彼らにとって地政学的に非常に大事であるということ。海洋国家であり、優秀で真面目な人達が住んでいます。歴史的に見て、彼らの直接的脅威は中国とインドであるとありますが、日本はかつて中国とロシアに勝ち、アメリカには負けましたが、それに懲りてうまく立ち回ろうとしているわけですね。日本とよい関係を持つことが、地政学的に中国、インド、アメリカに対する牽制になるわけです。彼らはそれを期待しています。日本が大国になるのを期待してはいないのです。日本がうまくやってほしい、そして我々と仲良くしてほしい、そのように私は感じました。

そのような意味で、日本マレーシア協会は本当に大事な仕事をしていると思いますので、これからも頑張つてほしいと思います。有村先生にも大いに期待しています。